The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	意味的側面からみたラテン語deponent動詞
Author(s)	山末, 一夫
Citation	大阪外国語大学学報. 1985, 68, p. 35-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81038
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

意味的側面からみたラテン語 deponent 動詞

山　末　一　夫

Semantic Aspects of Latin Deponent Verbs

Kazuo YAMASUE

The function of Latin deponent verbs which have only passive voice in spite of their active meanings is misunderstood on account of the word "deponent". Most of the deponent verbs inherit semantically the function of the middle voice in Proto−Indo−European; the rest of them inherit the function of the passive voice.

The middle deponent verb always implies the existence of the partner with/to whom the agent acts; the passive deponent verb the involuntariness of the agent. Consequently the difference between deponent verbs and ordinary verbs is always clear even in verbs of similar meanings. Both *loquor* and *dicō*, for example, apear nowadays to have a similar meaning, but the former implies the partner to whom the agent speaks and by whom he wants to be understood, while the latter shows the mere utterance of the agent. Similarly, as compared with *pugnō*" I fight", *proelior* means" I engage the enemy".

Involuntariness in *nāscor* "I am born", *sortior*" I draw lots", *patior* "I suffer", etc. will be easily understood.

I

ラテン語には一般に deponent 動詞[1]とよばれている範疇の動詞があるが、この呼称は形式的には受動形をしていながら、意味的に受動態(相)[2]とは受けとれず、またそれに対応する能動態(相)の形を原則として持たない一群の動詞に対して便宜的に使われている。おそらくは能動態の形式をすて去っているもの(dēpōnentia)という意識から、その語が由来しているのであろう。しかしながら能動・受動といっても、古典語と近代諸語では区別の概念が異っており、ラテン語のような古典語だけでなく近代語においても形式と意味内容の差はやはりみられる。能動態の動詞でも、その意味する動作が能動的であるとは限らない例は多数ある。例えばフランス語で

Cette fenêtre ouvre sur la rue. 《この窓は通りに面している。》

La chambre donne sur le jardin. 《部屋は庭に面している。》

La poutre porte à faux. 《梁がはずれている。》

のように、自動詞ではあるけれども、能動性が稀薄な能動態は多い。この問題には自動詞・他動詞の区別も関係しており、ラテン語のように自動詞と他動詞の区別が必ずしも明確でない言語で、近代諸語の視点から能動・受動の区別を考えてみても明確な線を引くことはできないであろう。

形式が受動形をしていて意味が能動的であると考えるのは、まさに後代の視点に立つからであって、意味と形式の差が当時もあったことを認めるとしても、ラテン語の話し手にそれらの動詞の能動形が果して必要であると感じられていたかどうかは疑問である。ラテン語はローマの政治的・経済的・軍事的な拡大と平行して古典期に入ってもますます表現力の幅を拡げ、生きた言語としての活力を十分に保っていたのであるから、もし deponent 動詞に能動形が必要であれば、それらを必ずやつくり出していたであろうと思われるからである。この種の動詞はそれが持つ意味から中・受動形が当然であり、能動形はむしろ不自然であると受けとられていたのではないか。例えば nāscor 《生まれる》では、英語の be born にもその受動性が形に残っているように、その主体は自分の意志で生まれてくるのではなく、母親によって生み落されるのであり、 tortor 《もだえ苦しむ》でも、その動作の主体は自らの意志でそうしているわけではなく、病気や肉体的・精神的苦痛などで苦しめられているのである。このような動詞はその意味からすれば受動的であり、能動形がないのはその必要がなかったからであるとも言えよう。

印欧祖語の時代には能動態に対するものとして受動態の明確な形態があったのではなく、中・受動形は区別されず同一の形式であった。言語資料が残されるようになった時代には各言語個有の受動形が発達してきているが、それも動詞の法・時称などの全体系にわたっているわけではない。ラテン語では中動と受動が形式的に区別できる法・時称はない。一般の文法書では能動態に対するものとして受動態の形を掲げているが、これには本来の中動的な意味の動詞の活用も含まれていることを前提としている。 eō 《行く》の受動態の変化形である itur, ibitur などの形も意味的には中動態と受けとるべきであろう。それではこの中動態の意味的・機能的な内容は何かということになると、印欧祖語のように存在したと考えられてもその実際の発話の形が記録されていない言語の場合は、その意味的・機能的な中味は後代の諸言語から共通要素を抽出するので、結果として抽象的なものとならざるを得ないが、 Delbrück その他の説明[(3)]でみてみると、ほぼ次の三つの要素にまとめられる。

（a） 動作主の動作または状態に対する強い関与

（b） 動作または状態が動作主に及ぼす再帰性

（c） 動作または状態が動作主に及ぼす相互性

これらはラテン語の deponent 動詞との共通点を想起させる。ラテン語文法においては、後世の文法家が受動態と同形の中動態をその意味・機能面までも含めて受動態の中に組みこんで記述しようとしたために、意味的・機能的に受動態の枠組みに入りきらない動詞の一群が出てきたと考えられる。それが deponent 動詞の大部分であると理解して大筋ではまちがっていないだろう。もちろ

ん、本来の印欧祖語の中動態とラテン語の deponent 動詞の機能が内容的に全く同一であるとは言えないが、ラテン語が独自の deponent 動詞を発達させてゆく過程で、印欧祖語から受けついできた言語財を新しい形に発展させたとみることはできるであろう。このように考えれば、 deponent 動詞に共通な意味または機能とはどのようなものであるかを探ってみる必要があるであろうし、また、なぜある動詞が deponentia という範疇に入るのかを語彙的な意味から説明することも必要となってくるであろう。そのような手続きを経てはじめて deponent 動詞の意味的・機能的な特徴が印欧祖語との関連においてとらえられるようになると思われる。

II

1．不隨意の受動性を語義にもつ deponent 動詞

まず、 deponent 動詞の中でも受動性の転化したものと考えられる「不隨意性」とでもよぶべき要素を意味の一部としてもった一群を列挙してみる。語形は不定法の形ではなく、古典語辞書の見出しに慣例となっている直説法・現在・一人称・単数形である。なお訳語はラテン語の幅広い意味を限られたスペースにすべて移しえたわけではないので、論旨を理解するための手段に添えた程度のものと考えていただきたい。複合語は基本となる語の意味からはずれる場合がしばしばある。

auspicor《吉凶を占う》
fatiscor《疲れる》
　dēfetiscor《疲れ果てる》
indignor《腹を立てる》
irascor《怒り出す》
lābor《滑る、落ちる》
　adlābor《～に向って滑る／動く》
　collābor《すっかり崩れてしまう》
　dēlābor《滑り落ちる》
　dīlābor《ばらばらに落ちる／流れる》
　ēlābor《（手から）滑り落ちる》
　interlābor《～の間を滑る》
　perlābor《～に沿って滑る》
　praelābor《前を滑る／流れる》
　praeterlābor《～の前方を流れる》
　prōlābor《前方へ滑る／動く》
　relābor《（もとの場所から）徐々に動く》
　sublābor《地上に落ちる、沈む》
morior《死ぬ》
　dēmorior《死に絶える》
　ēmorior《亡びる》
　immorior《（ある場所で）死ぬ》
　inēmorior《（ある情況裡に）死ぬ》
　intermorior《突然に死ぬ》
　praemorior《夭折する》
nāscor《生まれる》
　agnascor《～の後で生まれる》
　ēnascor《成長する、芽が出る》
　innascor《～に生まれる》
　renascor《生まれ変る》
　subnascor《～の代りに成長する》
obliviscor《忘れる》
odōror《匂う、嗅ぐ》
patior《蒙る》
　perpetior《苦しみぬく》
　suppetior《助ける（＜下で苦しむ）》

subterlābor《～の下方を滑る／流れる》
mîror《驚く》
admiror《驚嘆する》
dēmîror《たまげる》
ēmîror《大いに驚く》
miseror《あわれに思う》
commiseror《同情する》
commisereor《憐みを示す》
reminiscor《思い出す》
sortior《くじを引く》
subsortior《補欠をくじで決める》
stomachor《怒っている》
tortor《もだえ苦しむ》
vereor《畏怖の念にとらえられる》
revereor《畏れ敬う》
subvereor《ひそかに恐れる》

これらの語の「不隨意性」については自明のものもあるが、若干の補足説明を要する語もある。sortior はその行為の結果が意のままにならないからである。 lābor は現代人がスキーやスケートをするようなつもりでは理解しにくいが、止まろうとしてもその場所にとどまれない点が不隨意である。しかしながら、動作主体がいつも人間である場合ばかりではないので、 lābor はあるいは他の視点からとらえる必要があるかもしれない。 lābor と多くの点で反意語となっている orior《昇る、生じる》とその複合語 aborior 《消え去る》などの意味の中に「不隨意性」を認めることにはやや抵抗を感じる。 lābor と類似の意味をもっている liquor 《流れ落ちる、溶ける》についても同様である。これらはいずれも「不隨意性」と言うよりは人間の意志を超越したところで起きる動作である。この点で「不隨意性」とのつながりがないとは言えないので、一応は類語としてここに挙げておきたい。 indignor, miseror などの一連の強い感情を表わす語は動作主の意図とは無関係にその感情に支配される点が受動的であると意識されていたのである。 fatîscor には形態上は対応する fatîsco 《割れる、疲れる》という能動形があるが、それを《疲れる》の意味に使うようになったのは主として帝政時代になってからであるので、別の deponent 動詞として扱った。odōror は odor 《匂い、香り》に受動形の語尾がついたもので、《匂いを受ける》意であるので純然たる受動性をもつとも考えられるが、この語の他に類似の受動性をもつ語は見あたらない。嫌な臭いでも嗅がなければならない点は「不隨意性」をもつと考えられる。

純然たる受動性は一般の動詞の受動態で表現できるのに対し、「不隨意性」を語義にもつ動詞はまさに隨意の態である能動態が語義上できないが故に deponent 動詞となったのであるといえよう。

2．中動性を語義にもつ deponent 動詞

この部類は数も多く、意味の上でも種々相を示し、推定される印欧祖語時代の中動態の動詞よりも質量ともにはるかに変化に富んでいるように思われる。

A．相手の存在が語義の一部になっていて、その相手に相関的に働きかける動作

中動性の一部分である相互性の発展したものと考えられるが、「契約する」とか「キスする」のように文字どおりの相互の動作から、たとえ一人の動作でも「話す」とか「ついて行く」のように相手の存在や反応が考慮に入れられている場合までが含まれることを前提としている。以下では一

応類似の意味をもつ語ごとにまとめて例を挙げる。

(a) 相互の動作

paciscor《(両者の意見が) 一致する、契約する》
dēpeciscor《取引きする、折合う》
stipulor《契約の条件として要求する、折合う》
astipulor《契約する》
instipulor《契約の条件として要求する》
restipulor《担保を求める》
negōtior《取引きする》
nundinor《市場で売買する》
altercor《口論する、議論する》
rixor《喧嘩する、口論する、ののしり合う》
osculor《キスする》
exosculor《愛情をこめてキスする》
perplexor《もつれさす》
luctor《格闘する》
ēluctor《追い払う》
obluctor《争う》
rēluctor《反抗する》
proelior《戦う》
dēproelior《決着がつくまで戦う》
dīgladior《剣闘試合で闘う》
moechor《姦通する》
scortor《娼婦と寝る》
amplector《抱く》
amplecxor《抱く》
complector《抱きしめる》

perplexor には相互の動作の意味がないように思われるかもしれないが、 amplector などの複合語の基本となった plectō は《しなやかな枝を編む》の意で、これらの複合語には枝状のものが絡みあったイメージがつきまとう。 amplector などの意味からすれば、 perplexor は《もつれ合う》が本来の意味であったと思われるが、それに使役的な意味がつけ加わっている。

(b) 多人数の動作

bacchor《お祭り騒ぎをする》
dēbacchor《わめきちらす》
perbacchor《お祭り騒ぎを続ける》
comissor《どんちゃん騒ぎをする》
circulor《仲間が輪になって集まる》
convīvor《会食する、宴会をやる》
liceor《競売で値をつける》

(c) 発話行為

ampullor《大げさな言葉づかいをする》
argūtor《喋る》
causor《弁解する》
contiōnor《呼びかける、演説する》
fābulor《物語る》
ēloquor《言い表わす》
interloquor《話しに割って入る》
obloquor《話しに異をさしはさむ》
proloquor《声に出して表明する》
ordior《(話し) はじめる》

fateor《打明ける》
confiteor《認める》
diffiteor《否認する》
infitior《否定する》
profiteor《公言する》
for《言う》
praefor《前もって言う》
profor《語る》
glōrior《自慢する、誇る》
grātor《祝う》
grātulor《(神に) 感謝する》
loquor《話す》
adloquor《話しかける》
colloquor《会話する》
polliceor《約束する》
pollicitor《(心から) 約束する》
queror《不平を言う》
conqueror《苦情を言う、嘆く》
queritor《大いに不平をならす》
testor《証人に訴える》
attestor《証言する》
antestor《証人として呼ぶ》
contestor《証人に呼びかける》
dētestor《神に～を罰し給えと訴える》
obtestor《証言してくれと頼む、嘆願する》
testificor《証言する》
vociferor《大声で叫ぶ》

polliceor, pollicitor は (a) の相互の動作とも考えられる。ordior に《(話し) はじめる》という訳語をつけたが、この語には単に《始める、のり出す》といった意味もあることが辞書に記載されている。しかしながら、この語だけの意味ではたしかにそれも妥当であろうが、コンテクストをよく調べてみると発話行為(書くことを含む)を表わす語がこの動詞の目的語(補語)となっている場合が比較的に多い。

nisi timide ad dicendum accedunt et *in ordienda oratione* perturbantur —— Cicero, *de Orat.* 1.119 《彼等が話すためにおずおずと(演壇に)近づき、演説を始めるにあたってすっかりあがってしまっているのでなければ》

profusis diu ac per silentium lacrimis, mox *invidiam* et *preces orditur* —— Tacitus, *Ann.* 4.53《彼女は長い間ものも言わず涙を流していたが、やがて恨みごとや願いごとを述べ始める》

principium orationis ab accusatione stultitiae *orsus* suae, postremo ad lacrimas .... effusus —— Livius, 44.31.13 《彼は自分の愚かさを責める気持から演説の最初の部分をやり始めたが、しまいには涙を流して》

これらの引用例はいずれも Oxford Latin Dictionary の ordior の項の 2. (tr.) To embark on (an undertaking, etc.), start, begin の個所に例証としてあげられている文である。もちろん、この他には第二の人生や戦争などを始める意味の例証もあるので、記載されている意味は正しいであろう。しかし《話しはじめる》の意味は2のbと3と4に項目を立ててあげてあり、むしろこの方が意味の主領域である。この語の完了分詞・中性形が名詞化した orsa にも《語、発話》の意味がある。《語を発する》と《始める》とは ordior の意味として分離していなかったと考えな

ければ、また単なる《始める》の意味だけの視点からは、それが deponent 形式とどのようなつながりを持っているのかいま一つ定かにできないと思われる。

dētestor は簡単にいえば《呪う》だが、神への懇願は必ずしも発話を伴わないかもしれない。それ故これに類した神への懇願もこの範疇に入ると考えてもよいであろう。

abōminor《予兆に示された出来事をそらせ給えと祈る》
precor《祈る》
apprecor《祈願する》
dēprecor《～が起らぬように祈る》
imprecor《～を垂れ給えと祈る》
exsecror《呪う》
veneror《拝む、懇願する》
dēveneror《～をそらせ給えと懇願する》

(d) 奨励・追従・詐欺・脅迫など

この項にみられる共通点は、発話行為そのものだけでなく、他の手段をも併用して相手に強い影響を与える行為である。

hortor《励ます》
adhortor《激励する》
cohortor《熱心に勧める》
dēhortor《思いとどまらせる》
exhortor《勇気づける》
calumnior《でっち上げの告訴をする》
calvor《ごまかす、だます》
frustror《あざむく》
mentior《嘘をつく》
ēmentior《でっち上げる》
nūgor《だまして言いのがれる》
sȳcophantor《詐欺をやる》
tricor《言いのがれる》
minor《脅す》
comminor《脅迫する》
ēminor《脅かす》
interminor《脅してやめさせる》
praeminor《脅しに使う》
minitor《威嚇する》
sōlor《慰める》
consōlor《慰めを与える》
assentior《同意する》
assentor《合づちをうつ》
adūlor《媚びへつらう》
blandior《機嫌をとる》
suppalpor《甘言で誘う》
supparasītor《食客として愛想よくふるまう》

(e) 発話によらない意志表示

ringor《いらだって歯をむき出す》
subringor《くやしさを顔に出す》
conscreor《咳払いする》
lāmentor《泣く、嘆く》

(f) －cinor形

この項では意味の共通点よりも形態の共通点を指標にしたが、-cinor を語構成の観点からみれば、そこに共通の意味が抽出できると考えた。

ālūcinor《驚嘆する、驚嘆して声を出す》
manticinor《予言する》
ratiōcinor《数える、計算する、考える》

latrōcinor《傭兵／追いはぎで生計を立てる》

lēnōcinor《（売春の）手助けをする、誘惑する》

vāticinor《予言する》

これらの語に共通した意味は一見しただけでは不明であるが、ラテン語の語構成の規則からすれば cinor は canō《歌うように声を出す、唱える》を複合語の第二要素として deponent 動詞にした形ではないかと推測できるので、その視点で意味を考えてみたい。《（歌うように）声を出す》のは発話行為の一種であるから deponent 動詞になるのは前述の（c）と同様に理解できよう。ālūcinor, manticinor, vāticinor についてはそれらの意味の中に canō の意味が含まれていることを理解するのは容易である。ratiōcinor も数をかぞえ上げるときに一定のリズムと抑揚で声を出すからであろう。lēnōcinor は第一要素に lēnis《やさしい、柔らかい》があることを考えれば、《やさしい声をかける》といった意味からの転化であろうと推測できる。latrōcinor は latrō《傭兵、追いはぎ》との複合語だが、当時の傭兵や追いはぎがどのような暮しぶりをしていたのか詳細な点は不明なので断定はできないが、彼等の職務上のパターン化された言葉の調子からこのような語構成ができたのであろう。なお manticinor は Plautus が彼の喜劇の中で使うためコミカルな感じを出そうとして、vāticinor（vāti－は《予言者》）をまねてギリシア語 μαντις《予言者》との奇妙な組合わせをやってつくり出した語であり、その場限りで後のラテン語文献には出てこない。この-cinor 形は語源的な意味からは（c）の発話行為の範疇に入れてしかるべきものであったかもしれない。

（g）追跡・追従・模倣

やはり相手の行為をもとに同様の動作を行う点は中動的である。

sequor《ついて行く、従う》

adsequor《（捕えようとして）後を追う》

consequor《つきそって行く、追う》

exsequor《列について行く、探し求める》

insequor《追跡する》

obsequor《衝動にかられる、従う》

persequor《ずっとついて行く》

prōsequor《従者としてついて行く》

resequor《話しについて行って返答する》

persector《くっつくように後を追う》

aemulor《競う、まねる》

graecor《ギリシア風をまねる》

pergraecor《ギリシア人のように陽気にさわぐ》

helluor《食事や遊びにぜいたくに金を使う》

imitor《まねる、似せる》

iuvenor《若者のように思慮のないふるまいをする》

luxor《ふしだらな生活をする》

rusticor《田舎に住む》

subsequor《踵を接するようについて行く》
sector《たえずついて行く》
assector《つき添う》
consector《見習う、求める》
scurror《道化役をやる》
vēnor《狩りをする》
pervēnor《くまなく狩りをする、くまなく探す》

helluor, iuvenor, luxor, rusticor は意味上この項に入ることが素直に理解しにくいかもしれない。これらの語は scurror が scurra 《道化師》をもとにつくられたのと同様にそれぞれ helluo《美食家》、iuvenis 《若者》、luxus 《ぜいたく、放逸》、rusticus 《田舎の》をもとにしてつくられ、《～風に生きる》といった模倣の意味を同様の意味をもつ中動態の動詞との類推から、or 形によってつけ加えた語構成であると考えられる。

（h）その他の「相手に相関的に働きかける動作」

（a）～（g）もやはり「相手に相関的に働きかける動作」であったが、そこでとり上げなかった動詞をこのような指標のもとに一まとめにして列挙することにする。いわば、その他大勢のような形になっているが、これらの動詞はいずれも相手または相対するものに、相関的なあるいは強い働きかけをなすか、相関的なつながりをもつことを意味する。

auxilior《助ける》
opitulor《援助する》
grātificor《親切にする》
tūtor《保護する》
opperior《待つ》
insidior《待ち伏せする》
praestōlor《期待する》
dēpecūlor《相手をだまして（財産などを）奪う》
fūror《盗む》
suffūror《こっそり盗む》
dēpopulor《略奪する》
perpopulor《略奪のかぎりをつくす》
frūmentor《糧秣を徴発する》
pābulor《糧秣を徴発する》
māterior《材木を集める》
praedor《戦利品として分捕る》
manticulor《巾着切りをやる》
lustror《淫売屋をうろつく》
crīminor《弾劾する、糾弾する》
nītor《よりかかる、力で支える、努力する》
adnītor《～によりかかる》
cōnītor《集中力を出す》
ēnītor《前／上方に向けて押す、努力する》
innītor《よりかかって支える》
obnītor《押し返す》
renītor《逆って力を出す》
nīxor《よりかかる（nītorの強意形）》
dominor《支配する》
dīlargior《寛大である》
mōrigeor《従順である》
iaculor《投げつける》
ēiaculor《ねらって発射する》
aspernor《追払う、拒絶する》
cavillor《あざける》
medeor《治療する》

piscor《釣る》
expiscor《情報を(釣り上げるように)探し求める》
consilior《相談する》
remuneror《償う、報いる》
ulciscor《復讐する》
refrāgor《～の不利になるよう働く、さまたげる》
suffrāgor《～への支持を表明する、後押しする》
medicor《治す》
mūtuitor《借りようとする》
mūtuor《借りる》
mercor《買う》
commercor《買う》
ēmercor《賄賂で買収する》
vador《再出頭のための担保をとる》
convador《再出頭のための担保を提出させる》

nîtor は英語 support oneself, ドイツ語 sich auf etwas stemmen, フランス語 s'appuyer sur, イタリア語 appoggiarsi su などのような表現にもみられるように再帰的とも受けとれる。この点と印欧祖語の中動態の再帰性については後述する。 māterior には相手との相関的な関係を見出しにくい。おそらくこれは frūmentor などの戦時における略奪・徴発行為からの類推でつくられた語であろう。用例もカエサルの『ガリア戦記』に frūmentor と併記されて一例があるだけである。

B．動作主の強い関与を示す動作

上記の指標は甚だ漠然とした印象を与えるかもしれない。他動詞の多くも動作主の強い関与を示すので、少なくともそれとの差をどのように考えればよいのかを明示する必要があるであろう。この表現は Delbrück に従ったのであるが、 Renou の表現を借りれば、動作または状態が動作主との利害関係において考慮されているとも言えよう。(4) 換言すれば、動作主の関与によって行われるが、その結果が動作主の利害にはね返ってくる動作といえる。 Delbrück が「ダイナミックな中動態」(das dynamische Medium)ともよんでいるのはこの点である。西欧近代諸語の自動詞・他動詞の区別はこれには当てはまらない。ここに挙げる deponent 動詞が必ずしも彼の「ダイナミックな中動態」の概念と軌を一にするものではないが、上記のような概念の延長線上で理解できる語が多いのも、それらが印欧祖語の中動態の機能をよく受けついできている証左といえるであろう。

(a) 思考に関する行為

commentor《考えをめぐらす》
contechnor《陰謀をめぐらす》
imaginor《自分の心に描く》
interpretor《解釈する》
meditor《考察する》
praemeditor《進んで考察する》
opînor《思う》
reor《思う、考える》
philosophor《哲学する》
comminiscor《工夫する》
recordor《思い起こす》

comminiscor は「不隨意の受動性」をもつ動作の項であげた reminiscor と同じ語構成要素をもっている。《思い出す》ことが隨意か不隨意かは議論が別れるところだが、 miniscor は語源からみれば《心に浮んでくる》意である。したがって reminiscor もこの項に入れるべきかもしれない。

（b）計測・観察・探究・推量などの動作

(a)の思考に関する行為と明確に別けられるわけではなく、(a)、(b)の両方にまたがった意味をもつ動詞もある。

arbitror《観察する、判断する》
mētor《測って目印をつける》
dîmētor《観測する》
mētior《計測する》
admētior《仕切る》
commētior《比べて計る》
dîmētior《間を計る》
ēmētior《測量する、（ある距離を）行く》
permētior《正確に計る》
remētior《同量のものを元にもどす》
contor《尋ねる》
percontor《調査する》
rîmor《探し出す》
sciscitor《尋ねて知ろうとする》
scîtor《探究する》
scurūtor《さぐりを入れる》
speculor《じっと観察する》
prospeculor《見わたす》
suspicor《推量する、疑う》
tueor《見守る》
contueor《注視する》
intueor《凝視する》
obtueor《正面から見すえる、（遠方に）～を見つける》

(c) 享受・経験・使用などの動作

この項は動作主のおおむね利益になる体験という見地から一まとめにできるであろう。

aprîcor《日光浴をする》
epuror《御馳走を食べる》
fruor《楽しむ、享受する》
perfruor《十分に楽しむ》
frūniscor《楽しむ》
fungor《果す、享受する》
dēfungor《ケリをつける》
perfungor《やりとげる》
laetor《喜ぶ》
ōtior《余暇を楽しむ》
ūtor《使う》
abūtor《使い果す》
deūtor《使い誤る》
vescor《利用する、食べる》
dēvescor《平らげる、呑みこむ》

epuror は「模倣」の項であげた helluor と意味が似ているが、 epuror のもとになった語が epurae 《祝いの御馳走》であり、それが単に《御馳走を食べる》という体験的な行為を表わすのに対し、 helluor は上述のように helluō 《美食家》を見倣って、その行為が習慣化し暮しぶりや生き方にまでなっている点は異なる。

（d）調節・試行・努力・獲得などの動作

この項は、やってみなければ動作主に利益をもたらすかどうかが不明である動作という共通点があるであろう。「獲得」はA．(h）の「略奪」と類似しているが、「略奪」が相手に被害を与えるのに対し、「獲得」は動作主の努力によってなしとげられる結果といえる。

apiscor《つかむ、つかまえる》
adīpiscor《達成する、獲得する》
indīpiscor《達する、かち得る》
redīpiscor《とりもどす》
architector《建造する》
cōnor《試みる、努力する》
experior《やってみて体験する》
moderor《調節する、抑制する》
admoderor《抑える》
ēmoderor《なだめる》
modulor《律する、歌う》
ēmodulor《しまいまで歌う》
mōlior《苦労してつくる》
āmōlior《とり除く》
dēmōlior《壊す、ひきずり降ろす》
ēmōlior《完成する》
obmōlior《障害物をおく》
praemōlior《進んで働く》
remōlior《重いものを押しもどす》
operor《精出して働く、祭儀をとり行なう》
perīclitor《敢てやってみる》
potior《手に入れる》

（e）歩行・移動・出発・徘徊・逡巡などの動作

人間の歩行がなぜ deponent の形式をとるのかという問には、たぶん的確な答がないであろう。歩を運ぶ行為が両足によって交互に行われる運動であるからとか、動作主の移動とそれに伴う外界の変化とが相関的にとらえられているからであるとか場当り的な思いつきの理由は考えられるけれども、それらはいま一つ核心に迫っていないように思われる。類似の意味をもつ eō 《行く》、incēdō 《進む》などの動詞が能動態で表わされていることを上記のような理由では納得のいくように説明できない不満が残るからである。それよりも deponent 動詞が類似の意味の能動態の歩行などを表わす動詞とどのような点で異なるのかを考える方が賢明であろう。漠然とした印象の域を出ないかもしれないが、 deponent 形式をとる以下の動詞は、動作主が動作の向う方向に対して何らかの心理的傾斜をもっているように思われる。それは vagor 《あちらこちらを歩きまわる》のように一見無方向の運動であっても、動作主の,「気ままに、奔放に」行われる動作となり、表面上は同様の動作である errō 《さまよう》とは異なる。また前述の incēdō 《進む》に比べて同様の意味をもつ ingredior 《進む、入る》では、動作主がはっきりした目的をもって歩む様子がうかがわれる。同じ作品の中の次の例を比べてみれば、能動態の動詞と deponent 動詞の差が理解できるだろう。

(1) Phrygii comites et laetus Iulus *incedunt* —— Vergilius, Aeneis IV. 140～1

《プリュギアの一隊も喜ばしげなユールスも進み出る》

(2) ingentem quatiens Mezentius turbidus hastam ingreditur campo ——Ibid., X. 762～3

《巨大な投げ槍を打ち振りつつ、猛り狂ったメーゼンティウスは戦場に進み出る》

（1）は狩りに出かける前に一同が勢揃いする場面の一部であるが、単にその場に人々が集まる様子だけを描写しているのに対して、（2）ではメーゼンティウスがアエネーアースを倒さんものと闘志をみなぎらせて進み出るさまが描かれている。もし（2）の ingreditur を同様の意味をもち meter 上の不都合もない incēdit にすれば、メーゼンティウスの猛々しい戦意は読者に伝わって来にくくなるにちがいない。歩行や移動などは必ずしも deponent 動詞で表わされる動作とは限らないが、 deponent 動詞を使うことによって上記のような動作主の心理的傾斜を伴った動作とすることができると思われる。もちろん本来の機能がそのようなものであっても、慣用となってしまえばそれが失われることもあり得る。

gradior《歩む》
- adgredior《～に向って歩む》
- antegredior《～の前に歩み出る》
- congredior《近づく》
- dēgredior《降りる》
- dīgredior《立去る、別れる》
- ēgredior《出て来る》
- ingredior《進む、入る》
- introgredior《中へ入る》
- praegredior《前を行く》
- praetergredior《通りすぎる》
- progredior《前進する》
- regredior《ひき返す》
- suggredior《接近する》
- supergredior《歩いて～の上を越える》
- transgredior《歩いて向う側へ行く》

grassor《行進する》
- dēgrassor《落下する》

adversor《～に逆って行動する》

āversor《避ける》

dēversor《(一時的にある場所へ往き）住まいとする》

obversor《往き来する》

spatior《ゆっくり余裕をもって歩く》
- exspatior《道をそれる》

cunctor《ぐずぐずする、うろつく、ためらう》

moror《立止まる、ためらう》
- commoror《かなり長くとどまる》
- dēmoror《遅らせる》
- immoror《とどまる》
- remoror《ぐずぐずする》

proficiscor《出発する》

vagor《あちらこちらと歩きまわる》
- ēvagor《あちこちに別れる》
- pervagor《～の辺りを歩きまわる》

pālor《(略奪などを目的に）四散して行動する》

peregrīnor《諸国を遍歴する》

moror は proficiscor と対極の概念をもつと考えられるのでこの項に入れた。 cunctor, moror には、動作主の他のいかなる場所へも行きたくないという心理的傾斜は十分に容認できる。

C. deponent 動詞の再帰性について

印欧祖語において推定できた中動態の三つの機能のうち、ラテン語 deponent 動詞に見出しにく

いのは再帰性であると思われる。A．(h) であげた nîtor の箇所でも触れたが、ある動詞に再帰性があるかどうかは、その言語の体系全体の中でその動詞がどのような役目を背負っているかによってきまってくるので、他の言語体系の視点からは、換言すれば他の言語の訳語をもとに語義を理解するだけでは、その動詞の再帰性を正しく判断できないと言わねばならない。 nîtor の他にも辞書をみれば、

	(英語)	(ドイツ語)	(フランス語)
laetor	congratulate oneself on	sich erfreuen	se réjouir
glorior	pride oneself	sich rühmen	se glorifier (cf. 自慢する)
operor	busy oneself		s'occuper
philosophor	study／apply oneself to philosophy	sich mit Philosophie beschäftigen	s'occuper d'études philosophiques
fungor			s'acquitter de

などの訳語を見出し得るが、そのような訳語からこれらの動詞が再帰性をもっていると結論を出すのは早計であろう。これらの動詞には pride oneself に対して boast のような再帰代名詞を使わない訳語も併記されており、またどの言語の訳語も足並みを揃えて再帰代名詞を使っているわけでもない。要するに再帰代名詞を使ってあれば再帰的であり、使ってなければ再帰的でないとする主張は、異なる言語の意味という鏡に映して見えている姿をとらえてなされているにすぎない。しからば再帰性の本質をどのようなものとして定義すればよいのかという問題になってくるが、これを客観的な立場で考察することはおそらく不可能であろう。特定の言語を使って記述すれば特定の立場に立つことになるからである。 deponent 動詞の機能として再帰性を認めにくいとする立場そのものも、筆者が分析に使っている日本語の意味の影響を受けていることを否定するものではないがこれまで述べてきたところからすれば、どの deponent 動詞にも積極的に再帰性を認める材料を見出し得ないでいる。

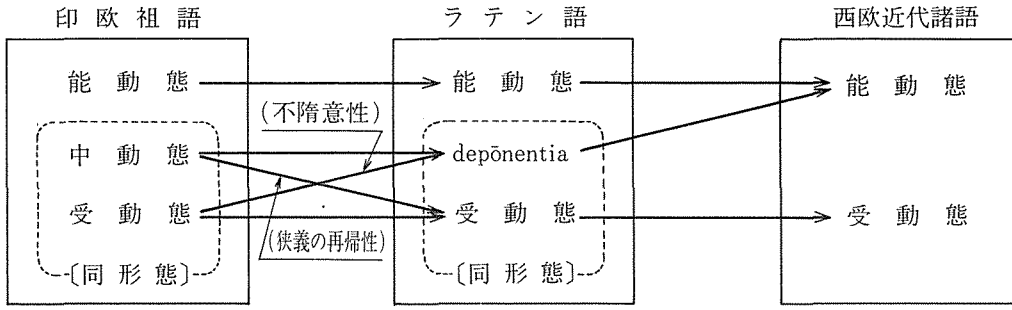
ところで《自分の身体に動作を加え、その結果が自分の身体に及ぶ》という狭い意味での再帰性は、ラテン語では一般の動詞の受動態として分類している形式で表現する。

amicior《自分の身体に衣服をまとう》　cingor《自分の身にまとう》
lavor《自分の身体を洗う》　ung(u)or《自分の身体に油を塗る》
plangor《(悲しみなどの表現に) 自分の胸などを打つ》など。

したがって、印欧祖語の中動態の機能のうち再帰性は狭義ながらも、祖語において中／受動態が同形であったために、ラテン語においては受動態として分類している形式にそれを委ねている恰好になっている。その点では deponent 動詞と軌を一にするが、上記の ung(u)or などは対応する能動態をもっているので、 deponent 動詞としては扱わず一般の動詞の中に入れるのが通例である。

Ⅲ

印欧祖語の時代の中動態はその名称の由来からすれば、西欧近代諸語の能動態と受動態の中間のもの（medium）という観点に立っているので、その機能と名称とのずれはともすれば不明瞭さや誤解を生ぜしめる。それは能動態と受動態の中間などでは決してなかった。ラテン語の文法が形成されつつあった6世紀頃の activus, passivus という概念は現代のそれにほぼ等しいと考えてさしつかえないであろう。それ故にこそ dēpōnentia なる範疇を理解に苦しむ名称のもとに創り出さねばならなかったと考えられる。印欧祖語の時代の中・受動態の概念と現代の能動態・受動態の概念とのギャップの間に、印欧祖語の特徴を濃厚に受けついできたラテン語の deponent 動詞の性格が存在する。それらの間の形態と機能面の変化を大まかに表にすれば次のようにまとめられるであろう。



すでにみてきたようにラテン語は印欧祖語から言語財として受けついだ中動態の機能を十分に活用し、多数の deponent 動詞をつくり出した。しかしそれにもかかわらず当時のラテン語の話し手が、こういう意味の動詞であれば、 deponent 動詞にしなければならないという絶対的な基準をもっていたかどうかは甚だ疑わしい。全く同様の意味を持つように思われる動詞の一方は depōnentia, 他方は一般の動詞といった例や、同一の動詞を両様に使うといった例によく出逢うからである。

{proelior / pugnō《戦う》} {moechor / adultero《姦通する》} {scrūtor / investigō《詳しく調べる》} {loquor / dicō《話す、言う》} など。

このような例をみると Meillet の言っているように、ある動詞が deponent 動詞であるかないかを先験的に予見することはできないという主張[5]もっともらしく思われる。しかしこの説には全面的には賛成できない点があることも、多数の deponent 動詞の意味を慎重に検討すれば自ずと明らかになってくる。上記の loquor と dicō は共によく使われる動詞であるが、両者の意味に大きな辞書でさえ同様の訳語を記しているので[6]、われわれは両者の間に意味の差がないかのような印象を受ける。しかし loquor が相手との意志の疏通のために話すのに対し、 dicō は話すことによって自分の意志を伝えるだけで、相手の応答は念頭に置いていないように思われる節がある。「発話行

為」のところであげた contiōnor 《呼びかける、演説する》が相手を念頭においた発話であるのに対し、 muttio 《ぶつぶつ言う、つぶやく》が一般の能動形で表わされることは示唆的である。proelior と pugnō も同様で、前者が相手と戦いを交えるのに対し、後者は単に戦闘行為を表わし、相手のことはあまり念頭にないように思われる。このようなテクストの表面だけではとらえにくい意味の差は当時の話し手の意識の内面または無意識の領域にまで立入るだけに画一的な尺度では推し測れないかもしれないが、当時の言語の構造を内部で支えてきた印欧祖語の文法的範疇を、その構造を調べる尺度に使うことは大いに有効であると考えられる。

今日の西欧諸言語の語彙によってラテン語の語彙の正確な意味を把握することは必ずしも容易ではない。現代の言語の尺度では測り得ない情報が古代の言語の形態の中に潜んでいるが、それを見つけ出すには何よりも当時の言語資料が役に立つ。ラテン語の話し手が編纂したラテン語辞典があればそれを利用するのが最適であるが、それが存在しない以上当時の著作のコンテクストを丹念に辿るのが最良であろう。しかしそれと共に、補助的な手段ではあるが、比較言語学の成果を利用することが古代文献の解釈に欠かせない要点となっている状況を本論を例として示すことができれば幸いである。

注

（1）形式所相動詞とか能相欠如動詞とかの訳語があるが、定着した訳語がないので一応英語の形容詞を採用しておきたい。

（2）我が国で出版された古典語の文法書では、英文法などの「態」(voice)を「相」とするのが一般であるが、ここでは大勢に従って「態」を使用する。

（3）B.Delbrück; Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen, Ⅱ, 1897, Strassburg, PP.425－432.
L. Renou; Grammaire sanscrite, 1975, Paris, P.392.
田中美知太郎・松平千秋；ギリシア文法，1968，東京，P．52.

（4）L. Renou; ibid.

（5）A. Meillet; Esquisse d'une histoire de la langue latine, 1966, Paris, P.148.

（6）これまで出版されたラテン語辞書の中で最も良心的であると思われる Oxford Latin Dictionary, 1982 の loquor の項にも dicō の項にも talk, speak, say が共通の訳として記されている。